



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより10月号2013

正教聖歌の伝統2

ビザンティン～ロシア～日本

●新シリーズ ロシアの伝統

来月から本文に入りますが、その前に



今月の予定

聖歌練習

名古屋、毎聖体礼儀後、10/6奉神礼と聖歌を学ぶ会

半田10/13日(日、代式後)主教祈禱の直前練習

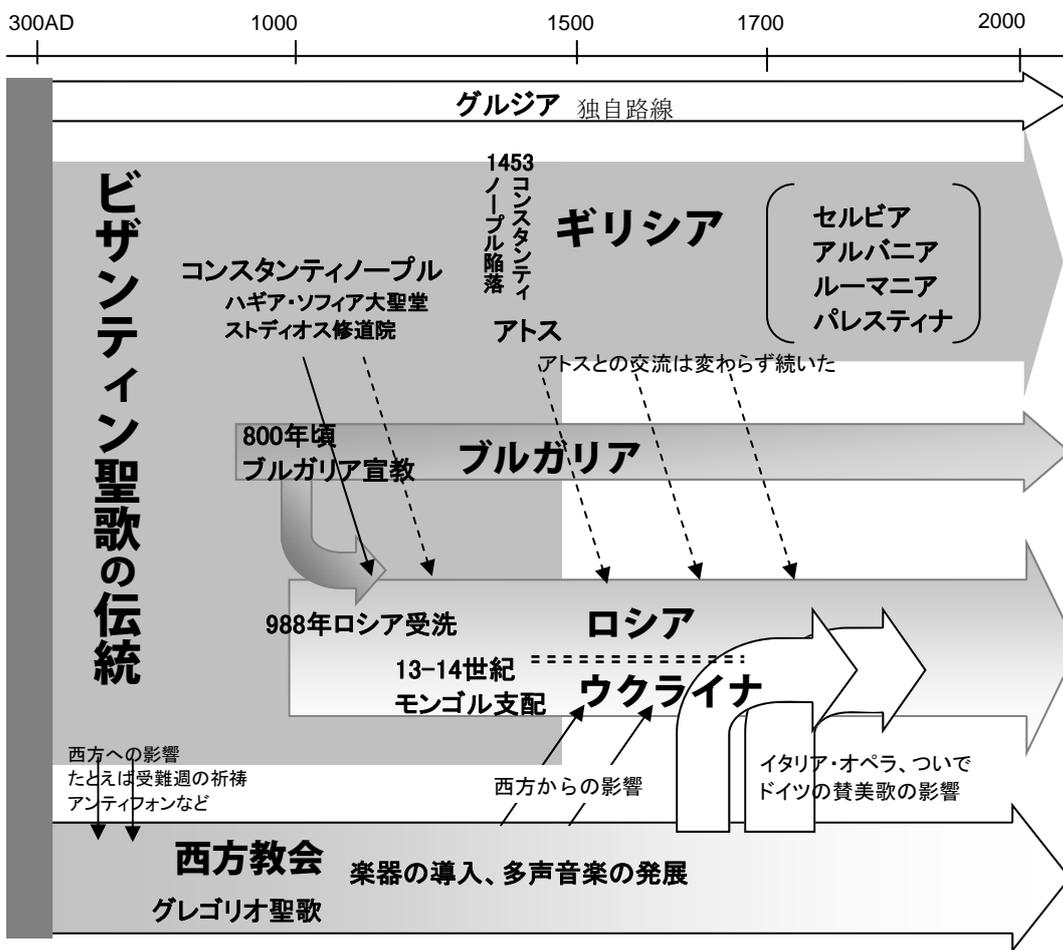
名古屋指揮当番

6日ピーメン松島 27日エレナ廣石

図解

第1回 ロシア聖歌の千年

おおまかに図解すると



解説

・ロシアは10世紀末正教を受け入れ、ビザンティンの伝統が伝えられた。

・百年早く正教国となっていたブルガリアからスラブ語の祈禱書や音楽がもたらされ、ロシアでも翻訳が進められ、ロシアの聖人の聖歌も作られた。

・13世紀14世紀はモンゴルに支配され、ロシア北部とウクライナ(南西ロシア)に分断。北部ではビザンティンからの影響が減少し、ノヴゴロドを中心にロシア独自の聖歌が発展。ウクライナは西方の影響を強く受けた。

・17世紀になるとウクライナから北部ロシアにも西洋音楽の合唱聖歌が入り、18世紀には国の西欧化政策にとまぬい、イタリア風やドイツ風合唱が全盛となった。

・19世紀後半、ロシア固有の伝統が見直され、古聖歌をとり入れた独自の聖歌の作曲が始まる。

・1917年革命によって教会は弾圧され、聖歌の発展は欧米の移民先に移る。

・1991年共産主義国家が崩壊し、教会が復興。さまざまな試みが行われている。

奉神礼と聖歌を学ぶ会 10月6日開講

名古屋

先月号でお知らせしたように「奉神礼と聖歌を学ぶ会」を月一度行い、講義と実習の両面から、聖歌の充実を図ってゆきたいと思っております。第1回は10月6日。テーマは「リトウルギアー共同作業としての教会」に変更しました。共同の礼拝の基本「アミン」を取り上げます。それから「楽譜のめくり方」、聖体礼儀の仕組みを学びます。第2回は11月24日を予定しています。

聖歌隊席で歌われる方も、奉仕をしながら適宜歌われる方も、どなたもご参加下さい。半田教会のかたもご参加下さい。

半田

10月13日(日、代式後)

主教祈禱の最終練習です。みなさんご参加ください。楽譜は教会に用意してあります(茶色の表紙)。希望の方はマリア山本さん、または野畑執事長までお申し出下さい。

祈りの音楽 — 奉神礼音楽を考える

長司祭セルゲイ・グラゴレフ
(聖歌作曲家)

ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ベレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

12. 奉神礼の聖歌をどう翻訳するかは指揮者の「手の内」にあります。指揮者の技術は基本です。聖歌隊は「あなたが得たもの」を見ています。指揮者の動き、表現、ポーズ、態度などは開かれた本です。指揮の技術とは体で祈ることにほかなりません。指揮者が祈りのリズムや、祈りとしての音楽を従順に身に受けるのではなく「自分」の音楽を作ろうとしたら、翻訳の善し悪しの問題にとどまりません。奉神礼の災難です。

翻訳の技をみがくの愈って、「音楽はそれ自体が語るものだ」などとうそぶく人がいます。事実、音楽は語るでしょう、指揮者が愈ったことがすべて露見します。注意散漫な祈りになるとしたら、それは間違いなく指揮者の責任です。

「奉神礼の聖歌に翻訳する」の項は今回で終了します。次回からは続編「聖なる歌のサウンド」を連載します。

参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 「やってみよう」 八調で歌おう

質問にお答えして

強調の手法、聖歌の伝統



前々回8月号で「スラブ語ではБлагослови（讃め揚げよ）と Господа（主）に高い音、長い音が置かれて、強調されています」と書いたところ、西洋音楽を学んだ方から「高い音、長い音」を用いるだけ強調とは言えないのではないか、強調の表現手段としては「速度を変える、繰り返す」などの手法を用いた方がよいのではないかというお手紙を頂きました。

まずお断りしたいのが、このコラムでは正教会聖歌伝統の音楽付け、特に八調のメロディ・パターンに基づく音楽付けについて話しているのであって、一般の西洋音楽とは異なる原則を前提にしています。

祈祷文の一部を速度を変えて歌ったり、祈祷書の指示以外の繰り返しを入れたりすることで強調するという手法は正教聖歌の伝統にはないものです。聖歌の歌詞は聖人が聖神に導かれて歌ったものですから、祈祷書どおりに歌わねばなりません。歌い手（作曲家）が歌詞を勝手に選んだり、繰り返したり、音楽上の都合でことばを入れ替えたりすることは禁じられてきました。確かに18、19世紀のロシアでは、西洋の宗教美術を真似て陰影をつけたイコンが描かれたように、同じことばを繰り返す合唱曲が作られたこともあります。正教聖歌の長い歴史の中では例外です。

イコンの型、聖歌の型

正教会は「型」を重視します。礼拝そのものに「型」があり、そこで用いられる祈祷文にも、所作にも「型」があります。イコンにも描き方の型があるように、聖歌には八調で歌うという型が与えられました。「型」は不自由なようですが、むしろ型に従うことの中に本当の自由に至る道があると教えられます。個人の考えや人間の感情の自由な表現を追求してきた西洋芸術とは姿勢が根本的に異なります。

ギリシアでもロシアでも「八調で歌う」原則はずっと守り続けられてきました。日本語は小さな音節の連続であるモーラ（拍）で構成され、高低アクセントです。強弱アクセントのはっきりしたロシア語（スラブ語）とでは音の構造も語順も大きく異なるので、19世紀ロシアから伝来した「八調」のメロディにあてはめるのは難しい点も多いのですが、まずは「型」に従って歌ってみることで自体に意味があります。イコンの材料に油絵やアクリル絵の具も用いることもありますが、伝統的なテンペラ画の画法を学ばずしてイコンを習得したとは言えないでしょう。苦労と工夫を重ねていくうちに、やがて日本語の祈祷文にフィットした聖歌が生まれてくるでしょう。

もう一つ、私たちは一般的に五線譜を用いますが、これも西洋音楽の伝統から生まれたものなので注意が必要です。五線譜を見ながら歌うと、どうしてもことばよりも「音」に注意が行きます。古い記号譜や、祈祷文だけを見て八調で歌うときには、ことばのリズムが自然に表れます。ですから五線譜を用いるときも、正教聖歌がことばを重視する音楽であることを念頭において、ことばのリズムを生かして歌うことが大切です。

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究

監修:ゲオルギイ松島雄一 編集:マリア松島純子